

空き家タウン

「ほら、あそこなんて2軒続きで空き家だ。昼間も人影がないしこの町はどうなるのかな」
埼玉県鳩山町の鳩山ニュータウン。30年以上住む民生委員の志賀登(72)は町を見回るたびに不安になる。人けのない家々には子どもの自転車など生活の跡が残る一方で、壁がめくれたり雑草が茂ったり。

1974年に分譲が始まった埼玉中部のニュータウンは東京都心から急行で50分、バスで20分の通勤限界に位置する。世帯数は約3000。2年前に150戸だった空き家は約200戸に増えた。

空き家急増の主因は相続だ。親が亡くなっても、残る家に戻る人が少ない。複数の人が相続し権利関係が複雑なことも。分譲した時期にもよるが、物件価格は購入時の4分の1だ。売りに売れず放置される家が多い。「分譲当時は活気があった。小学校も2つに増やした」。その子どもたちが去り、残ったの

は高齢の親世代。「見回る地区だけで20人近い独居老人がいる。空き家はまだまだ増える」
同ニュータウンについて、国

土交通省が気になる試算をしている。現在36%の65歳以上の人口比率は2025年に53%に上昇。一方、7944人の人口は45年に3018人に減る。「限界集落」化だ。その流れを止める動きは住民にも町にもない。

空き家の急増はここだけの話ではない。建築計画が専門の明治大学教授、園田真理子(56)は、首都圏の住宅地が開発から50年ほどたつと空き家が爆発的に増える法則に気づいた。35歳前後で家を買った50年たつと85歳。親は寿命を迎える。その時、子は60歳前後で自分の家を持つことが多い。「高齢化で子に継がせる時機を失った家が空き家になり町を崩壊させる」。大都市圏に住宅が大量供給された70年代から約40年、埋め込まれた相続の时限爆弾は破裂寸前だ。

「愛着ある我が家だが死んだら売ってもらう」。東京都八王子市に住む鈴木貞子(81)は1年前、遺言を書いた。死後に家は売却し、その金を既に家を持つめい2人に相続させる。夫と息子が先立たれ独り暮らし。こうすれば家と土地を知らない誰かが生かしてくれると思う。

手続きをした弁護士の小倉保志(50)は「独居で死後の自宅処理を考える人はまずいないが、今後は必要」と指摘する。空き家を放置し、町をさびれさせてよいか。残す者、継ぐ者双方が問われている。(敬称略)

1億人の相続 4

迫真
HAKUSHIN



手入れがされず荒れた空き家の庭

(埼玉県鳩山町)